

『徐福渡来は琉球経由だった』

たかみやしんじ

全世界規模で地球温暖化が進んでいる。近年の地球温暖化は、温暖化によって日本に起こった所謂「縄文の海進」のような現象などとは原因が異なり、それは自然現象によるものでなく、人間活動による二酸化炭素などの温室効果ガス発生が主な原因であり、かつまた、温暖化が急激に起こっていることが問題とされているのである。

この地球温暖化で世界ではいくつかの影響が報告・報道されている。北極の氷の氷解が進み、海面上昇をきたす。ミクロネシアなどの一部の国では国土喪失の危機にあるという。また、温暖化や気候変動により動植物の生態系に変化が生じ、多くの生物が絶滅の危機に瀕している。

特に最近世界的に多発している現象に熱波と干ばつによる「山火事」の発生がある。これらはニュースで大きく取り上げられているので多くの知る所であろう。また、地域によっては水の供給に危険を及ぼすような干ばつ。海洋の酸化(海水が二酸化炭素を吸収することで酸性化が進む)と高温化による珊瑚の白化、農作物の生育への影響などなどあげればきりがないと言えるだろう。

近年のテレビ放送(2025年8月、民放)のニュース番組で沖縄のサンゴ礁の死滅とサンゴの北進について報道されていた。

恩納村は沖縄本島のほぼ中央の西部海岸側に位置する風光明媚なリゾートである。真栄田岬、隆起サンゴ礁の奇岩が続く。透き通る海に熱帯魚が群れる絶好のダイビングポイントと言われる。この恩納村の海の珊瑚が温暖化の影響で死滅の危機にあるという。一方、三重県の伊勢地区の海には、従来見られなかったサンゴが発生しているというのだ。この伊勢地区は名のとおり「伊勢海老」でも有名である。しかしながら、猛暑による海温上昇によりその収穫量はひと頃の十分の一になってしまっているという。それは、海水温上昇により「ガンガゼ」(ウニの一種、棘に毒がある)が大量発生し海草や藻を食べつくしてしまうことによるのだという。また、驚くことにサンゴは東京湾でも発見されたことが報道されていたのである。

AIによると、サンゴ礁の北限は従来種子島とされていたのであるが、近年では壱岐や対馬でも確認されているという。

このサンゴの北進は誰が考えても直ぐに海流のことに思いつくのではなかろうか。即ち、太平洋側のことについては「黒潮」の流れに身を任せて辿り着く。日本海側のことについては「対馬海流」の流れに身を任せて辿り着く。そして、その流れの元はといえば、それは南島諸島界限なのであろう。

このような海流は古代から弛まなく続いている。本稿では、「黒潮」及び「対馬海流」が古代琉球人の一部の人々を九州地区へ運んで行ったこと、そして、琉球に渡来した徐福一行がその跡を辿るように九州島に進んで行った模様を探ってみたい。

序章 日本人の起源説～最近のゲノム解析～

(1) 三重構造説の発表

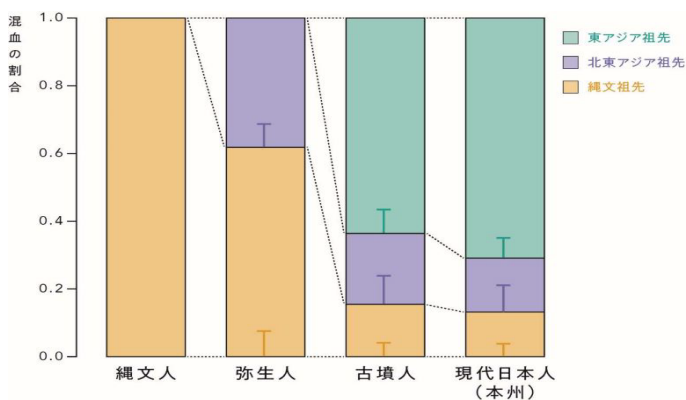
日本人の起源説について、古くは、置換説(最初に日本に渡来した先住民がいて、後にそれと異なる渡来がありその末裔が現在の日本人とするもの)、混血説(最初に日本に渡来した先住民がいて、後にそれと異なる渡来があり、先住民と混血したのが現在の日本人とするもの)、変形説(最初の渡来人が時間的に変化して現在の日本人になったとするもの)などが唱えられていた。

二重構造説(二重構造モデル)は、故埴原和郎東京大学名誉教授(1927-2004)によって1991年に発表された。埴原教授の専門分野の頭骨の分析から提唱されたものであるが、ごく簡潔に説明すると以下のごとくである。

“東南アジア起源の縄文人という基層集団の上に、弥生時代以降、北東アジア起源の渡来系集団が覆いかぶさるように分布して混血することにより、現代日本人が形成された。渡来系集団は北部九州及び山口県地方を中心として日本列島に拡散したので、混血の程度によって、アイヌ、本土人、琉球人の三集団の違いが生じた”。

この二重構造モデルを発展させて、「日本人の三重構造モデル」を提唱したのが、アイルランドのダブリン大学、金沢大学、鳥取大学などの国際共同研究グループだ。2021年9月のニュース・リリースにより、日本列島の遺跡から出土した縄文人・弥生人・古墳時代人のパレオゲノミクス解析を行い、現代における日本人集団のゲノムが三つの祖先集団で構成されていることを世界で初めて明らかにした。

この研究では、日本列島の遺跡出土人骨から12個体(縄文人9・古墳人3)のゲノムデータを取得、これらに加え既報の縄文人や弥生人のゲノムデータと大陸における遺跡出土人骨のゲノムデータを用いて大規模な集団パレオゲノミクス解析を行った。その結果、20,000年前から15,000年前に大陸から分かれた縄文人が縄文早期頃までは小さな集団を維持してきたこと、そして、稲作文化がもたらされたとされる弥生時代には北東アジアを祖先集団とする人々の流入がみられ、縄文人に由来する祖先



● 縄文時代から現代に至るまでの日本人ゲノムの変遷

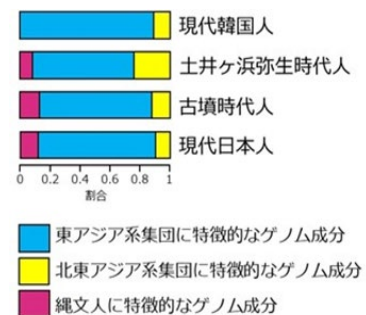
に加え弥生人には第二の祖先成分が受け継がれていることが分かった。しかしながら、古墳人にはこれらに加え東アジアに起源を持つ第三の成分が存在しており、大陸からの人の移動と混血が伴ったことが分かった。そして、この三つの祖先は現代日本人のゲノム配列にも受け継がれているというのだ。(左図は広報から)

(2) 三重構造説に対する別意見

三重構造説のゲノム解析では、弥生人の代表として下本山岩陰遺跡(長崎県佐世保市)の弥生時代人のゲノムデータを使用している。ところが、それは「在来系(縄文系)弥生人」と分類されているものであり、「渡来系弥生人」のゲノム解析が望まれると言われていたという。

東京大学大学院理学系研究科と東邦大学医学部・土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムの共同研究として、土井ヶ浜遺跡(山口県下関市)の弥生時代人(渡来系弥生人)と縄文人・古墳時代人・現代日本人などとのゲノム解析が行われた。

その結果の発表(令和6年10月:東京大学大学院理学系研究科広報委員会)によれば、①土井ヶ浜弥生時代人は現代日本人と同様3つのゲノム成分を有していること、②土井ヶ浜弥生時代人は遺伝子的に古墳時代人に最も近く、次に現代日本人、古代韓国人、現代韓国人の順に近縁であること、③現代韓国人を古代日本に渡来した集団と仮定し、この集団が縄文人と混血して着目する集団が誕生したというモデルを統計学的に評価した。その結果、この単純なモデルが土井ヶ浜弥生時代人、古墳時代人集団、及び現代日本人集団のゲノム成分をうまく説明できることが明らかとなったこと、が説明されている。(右図は広報より)



また、これらの結果は、東アジア系と北東アジア系のゲノム成分を併せ持つ集団が弥生時代に朝鮮半島から日本列島に渡り、縄文人と混血して誕生した集団が現代日本人となったことを強く示唆していると説明されている。

(3) 下本山岩陰遺跡出土人骨の核ゲノム分析

「西北九州弥生人の遺伝的な特徴」という論文が WEBSITE に掲載されている。

(国立科学博物館人類研究部 Published online 8 June 2019 in J-STAGE)

下本山岩陰遺跡(佐世保市)出土人骨2体の核ゲノム分析を行った。これらの人骨は、遺跡の地理的な位置と形態学な研究から縄文人の系統を引く西北九州弥生人集団の一員と判断されている。しかし、次世代シーケンサを用いた DNA 解析の結果、共に縄文系と渡来系弥生人の双方のゲノムを併せ持つことが明らかとなった。

これらの人骨の帰属年代は弥生時代末期である。この時期に九州沿岸地域でも在来集団と渡来集団との間で混血がかなり進んでいたことが明らかとなった。このことは、これまで固定的に捉えていた西北九州弥生人と渡来系弥生人との関係を捉えなおす必要があることを示している。

さて、この分野の研究は、今後より多くのデータのゲノム解析が進められることによって、日本人の起源説はより精度の高いものになっていくのであろう。

本稿では、北東アジア系のゲノム成分を持つ集団と東アジア系のゲノム成分を持つ集団が別々に渡来した可能性も視野にいて次の記述に進んでいきたい。

第1章 領巾(ひれ)と枇榔(びろう)

20,000年前頃日本列島は、北海道北部と九州北西部で大陸と繋がっていたのではないかと考えられている。そして、日本列島は16,000年前から6,000年前にかけての海面上昇により次第に大陸から孤立していった。この立地上の特色から日本では独特の縄文時代が形成されたのだった。16,000年前から3,000年前が縄文時代と言われている。

この日本が大陸と繋がっている頃、ユーラシア大陸北方から流入した人たち、そして「ホアビニアン文化」を築いた東南アジアの人たちが中国沿岸部を北上して日本に流入した。この人たちが縄文人を形成したのではないかとされているのである。

しかしながら、7,300年前に歴史を大きく揺るがした「鬼界カルデラ大噴火」が発生する。その火砕流は鹿児島県南部に到達したとされ、また、火山灰は九州全域を覆い、20cm から30cm堆積したのだという。この火山灰の堆積レベルは縄文時代の九州島の動植物や海資源に(そして縄文人に)壊滅的な影響を及ぼしたとされている。そして、その復活には数百年を要したのだとされている。



図1 鬼界カルデラ(イメージ図) [5]

そのようなことから考えると、その後の九州島の縄文人というのは、その後に朝鮮半島や琉球から流入してきた人たちが主流とされなくてはならないだろう。とりわけ、東南アジアの島々に追われた「ホアビニアン文化」を築いた人たちの南西諸島を經由した九州島への流入に注目したいところである。

*ホアビニアン…4万年前からアフリカから東南アジアに到達した狩猟採集民族。
4千年前頃から農耕民族に追われ東南アジア各地に拡散した。

(1) 領巾(ひれ)について



インドネシアの「ライジュア島」。魔女伝説など数々の数奇な風習が伝えられている。それらの一つに、姉妹がその兄弟を霊的に守護するという信仰があり、兄弟が危険な場所に旅立つ時にはその姉妹は弟の無事を祈って、自ら織った「イカット」という布を兄弟に贈るという。 [6] 図2 イカット(イメージ図)

驚くことに、『古事記』にそれに類することが記述されているのである。オオナムジがスサノオの試練を受ける段。蛇の室屋で寝るようスサノオに命じられたオオナムジにスセリヒメがそっと近寄り、領巾～薄く細長い布で、難を逃れられる呪力があると信じられていた～を渡し、

そっと囁いた。“これは蛇の領巾といって呪力があるの。蛇があなたを咬もうとしたら三度振ってくださいな” …この夜オオナムチはぐっすり眠ることができたのだった。

上記のように、「ホアビニアン文化」を築いた集団の一部は、ユーラシア大陸を追われて東南アジアの島々にも拡散していった。そして、その一部の人々(例えばライジュア島の人々)が丸木舟に乗って島伝いに北上して、沖縄にそして日本(列島)に進んでいったのではないかと考えられるのである。

この「領巾」、奄美群島や八重山諸島にかけて「手巾」(ティサージ)と呼ばれる手拭いのような織物がつくられてきた。“ティ”は手、“サージ”は布。丈の短い一枚の布である。そして、「手巾」は女性によって織られる布であり、女性の象徴的な持ち物でもあった。

「沖縄学の父」と言われた伊波普猷氏は、姉妹が長旅にでる兄弟のために航海安全を願って作る「姉妹手巾」というものがあり、それがヲナリ神信仰に関わることを指摘した。(『女性がおくる布』日本学術振興会特別研究員:東村 純子氏)

本稿では、この「手巾」のルーツは正しくライジュア島などに発する”イカット“がその元であると考えたものであるがいかがであろうか。

また、『魏志倭人伝』には次のような記述がある。“卑弥呼は鬼道に優れていた。卑弥呼には夫がいなかったが、男弟がいて、卑弥呼を助けて国を治めていた”。これらのことの意味するのは、卑弥呼は鬼道(呪術)に優れており国民の信頼を得ていた。そして、政治や軍事は弟が差配していたものと理解されるのである。

このような卑弥呼の原像は、琉球の「斎場 御嶽」を管掌する「聞得大君」に求められるだろう。「聞得大君」は琉球の信仰において最高位の呼称であり、琉球国王に並び、琉球王国全土を霊的に守護するものとされていた。この「聞得大君」、国王の「をなり神」(妹が兄を守護する)と言われている。こうした琉球の信仰については、琉球王朝以前の村落時代(3世紀～12世紀)においても御嶽が信仰対象であり、この祭祀を根神(姉妹)が司り、その信託によって根人(兄弟)が政治を行ったとされているのである。

この「領巾」については、記紀に記述されるだけでなく『万葉集』にも幾つかの歌が掲載されているというのである。(『女性がおくる布』日本学術振興会特別研究員:東村 純子氏)

例えば、“遠つ人 松浦佐用姫 夫恋に 領巾ふりしより 負える山の名”(万葉集:巻五—871 作者不詳)。松浦佐用姫が唐津から任那に出港する夫の無事を祈って領巾を振ったという佐用姫伝説から、唐津湾の特別名勝「虹の松原」に在る「鏡山」は「領巾振山」とも言われるという。

これらのことは一体何を意味するのであろうか。一つは、記紀や万葉集が世の中に出了頃、「領巾」のこと、また、「をなり神」のような(沖縄の)信仰が受容されていたの

ではないかということである。しかしながら、そのルーツが琉球であった(或いはもっと溯れば東南アジア)ということは公にはならなかった。されなかった。その理由は、大和王権にとって琉球は夷でなければならなかったからであろう。

(2) 枇榔について

ビロー(蒲葵、枇榔)はヤシ科の常緑高木。別名はホキ(蒲葵の音)、クバ(沖縄県)など。古名はアヂマサ。東アジアの亜熱帯の海岸付近に自生する。日本では、南西諸島、小笠原諸島、九州南部(鹿児島県・宮崎県)、四国南部などに自生する。

図3 枇榔ヤシ(宮崎県立学校事務職員協会・「ビローページ」より) ㊦



民俗学者の折口信夫氏はビロウに扇の原形をみており、その文化的意味は大きい。扇は風に関する呪具であったとする。また、谷川健一氏は奄美・沖縄の御嶽には広くビロウが植えられておりビロウの木の下が拝所であること、ビロウが南島人の貴重な生活資材になっていたことを指摘している。

また、朝廷との関わりとしては、平安時代の王朝、天皇制においては松竹梅よりも、なによりも神聖視された植物で、公卿に許された檳榔毛の車の屋根材にも用いられた。天皇の代替わり式の性質をもつ大嘗祭においては、現在でも天皇が禊を行う「百子帳」の屋根材として用いられている。(Wikipedia)

宮崎県高等学校教育研究会事務部会(宮崎県立学校事務職員協会)がWEBSITEに「ビローページ」を公開している。その中に柳田國男氏の『海南小記』より「阿遅摩佐の島」を引用している箇所があるので要点を抜粋してみたい。

“(柳田が)明治41年7月頃、日向の青島を訪れた。当時の東宮様は船でこの島にお立ち寄りになった。青島神社の背後、大海に面した東海岸に7, 8本の蒲葵の木を伐って平地を作り、蒲葵を柱とし屋根とした、ご休息の四阿屋(あずまや)が建てられてあった。なお考えてみれば、大昔、出雲国のある海辺に旅の皇子のために造られた檳榔の長穂宮というのも、はるかな年代を隔てて相似たる国人の心づくしを語るもののごとく思われる”。

“都の風流の一つに数えられた、いわゆる檳榔の毛の車なども後には赤色の簾に錦の縁、下簾は蘇芳の末濃にして帖は纒縹縁、榻(しじ)に金銅の金物というような花やかなる装飾をもって、淡泊なるコバの葉の光が潤色せられたといひます”。

“コバの樹の分布については、ヒヨドリなどよりもはるかに貴くかつ霊ある者が、その運搬および保護に参与していたらしいことであります。…南九州各地においても今日蒲葵の存在する場所は若干の人家邸内を除いては殆ど神の社の地であります。…日向の青島にも権現の社あり、彦火々出見尊と仰がれています”。

長穂宮は、『古事記』の物言わぬ御子(ホムツワケ:垂仁天皇の皇子)の段に著される。占いの結果、御子が話せないのは出雲の神オオクニヌシの祟りとわかったイクメ

イリヒコ(垂仁天皇)は皇子を出雲へと向かわせる。出雲で参拝したところホムツワケは言葉を喋ることができた。そこで随行の者たちはこれを喜んで、皇子を檳榔の長穗宮に移し、早馬で天皇に報告した。天皇はたいへん喜んで随行の者たちに出雲に戻って大神の宮を造らせたのだった。

さて、これまでの「領巾」と「枇榔」の記述により、東南アジア(ライジュア島など)から琉球へ、そして琉球から九州(主として南九州)へと文化・宗教などが伝播してきたことを確認したのであるが、注目しておかなくてはならないのは伝播の主体が上部階級、或るいは、貴族であったり皇族であったりという点である。この点については後述することにも関係する重要なファクターではないかと思われる。

第2章 倭人とは誰か

中国の史書に書かれた古代の「倭」について、『邪馬台国をとらえなおす』(著者:大塚初重氏)では次のように記述している。

“「倭」について初めて書かれた中国の正史は、『^{ろんこう}論衡』(王充:27年～90年頃)と『漢書』(班固:32年～92年)地理志とされている。『^{ろんこう}論衡』には、「周の時、天下太平にして、越裳白雉を献じ、倭人暢草を貢す」などと記されている。暢草は薬草で、酒に浸して服用されたもののようである。『^{ろんこう}論衡』においては倭を中国の呉越地方(長江の下流域)の南付近と認識していたらしい。『^{ろんこう}論衡』にある周は、中国の歴史時代において夏(前21世紀～前17世紀)、商(前17世紀～前12世紀)について、紀元前12世紀から紀元前256年にあったとされる”。

“一方、『漢書』は、「楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国、歳時をもって来たりて献見すと云う」とある。楽浪郡は今の平壤付近にあった。前漢(紀元前202年～紀元8年)の武帝が紀元前108年に衛子朝鮮の地に設置した直轄領四郡の一つである。その楽浪の海のなかに弥生中期後半(紀元前1世紀頃)百余国に分かれた倭人の国があった”。ここでは、『漢書』における倭人国の位置の認識は『^{ろんこう}論衡』とは大きく異なっているということを理解して次の記述に進んでいきたい。

さて、『^{ろんこう}論衡』に記述されている「倭人」とは古代日本人のことであったのだろうか。古代日本人が呉越地方の南付近に勢力を構えていたとは推論の域を超えるのではと思えるのである。また、日本から朝貢するのに中国南部産とされる暢草を貢物として選ぶということも考えにくいのではと思われる。しかしながら、『漢書』では楽浪郡の海の中に百余国の「倭人」の国があったという。この『漢書』に記述される「倭人」は古代日本人であったのだろうか。これらの疑問に答えるには「倭人」とは誰か、「倭人」の国とはどこかということが論じられなくてはならなくなってくるのである。

この謎の扉を開こうとした先達の諸説を古田武彦氏が紹介している(『邪馬一国への道標』 角川文庫:website)。

一人は騎馬民族説で有名な江上波夫氏だ。江上氏は『^{ろんこう}論衡』に記述される倭人の

貢献物“暢草”は中国の鬱林郡の名産の“鬱金草”と解し、この倭人とは鬱林郡に遠からぬ江南地区に住んでいた種族だろうと推定した。即ち、日本列島に住む倭人ではないと。そして、この種族が日本列島へ民族移動したのではないかと。(『古代史の謎』朝日新聞社刊：所収講演)

もう一人が井上秀雄氏だ。『論衡』に記述される倭人は江南の倭人である。古代の東アジアでは倭人といってもいろいろあったとして「倭人広域論」を展開した。このことから、『論衡』記述の倭人は日本列島の倭人とは限らないとした。(『任那日本府と倭』東出版)

同様の説は鳥越憲三郎氏も展開していた。江南地方を中心とした「倭族」をいう概念を作り上げて、中国各地に「倭族」の存在を主張した。『論衡』に記述される暢草は「靈芝」であるとし、その産地は四川省巴県(現在の重慶市あたり)の山地などであったらしい。その巴人のことが梁の『文選』に“倭人の習俗である文身・断髪し、夜明けまで歌垣をしていた”と記されているという。そして、『論衡』に記述される倭人は日本人ではなくて、中国四川省の巴国(或いは蜀国)の倭人であったとしている(但し、周の時代ではないとしている)。また、白雉を献じたという越裳(国)も時代は周代のことではないとしている。(『倭人・倭国伝全訳』角川文庫)

これらの中国の(江南地区から揚子江上流域)倭人説に対し、古田武彦氏は日本人(朝鮮半島から北九州)倭人説を主張した。様々な分野にわたる主張であるが、重要なエッセンスは以下のとおりではないかと拝察する。

一つは、「中国海」という概念を持ち込んだことである。渤海、黄海、東シナ海をして「中国海」と命名したこと。これを囲む環・中国東海岸～朝鮮半島～日本列島が、人事・文化・経済などの交流が盛んに行われる環境にあったこと。そして、縄文人をして中国大陆との、また、朝鮮半島との様々な交流の可能性を指摘したのである。

もう一つが、『論衡』の“周の時、天下太平、越裳白雉を献じ、倭人鬯艸を貢す”に続き、“白雉を食し、鬯艸を服するも、凶を除く能わず”と記述されていることに着目したことである。即ち、周においては白雉・鬯艸が吉を呼び凶を除く「縁起物」として飲食されていたと。このことは貢献する国々が地場の銘産品を贈るという以上のことを意味している可能性があるのではないかと。

次の一つが、王充と班固は同時代人であること。また、二人は共に光武帝が創設した「太学」に学んでいたということである。即ち、二人は「同世代のインテリ」だった。このことは、『論衡』と『漢書』は共に同時代の同一の読者に対して書かれている。即ち、“紀元一世紀後半の後漢の高級官僚やインテリ”という読者階級が対象なのであった。だから、「楽浪海中の“倭人”」と「鬯艸を貢す“倭人”」を読者は同じ“倭人”と読むのであろう。若し、同じ“倭人”でないのなら、例えば王充は「江南の“倭人”」といった形容詞を入れるのが自然ではないかと。(『邪馬一國への道標』角川文庫：website)

だいぶ前ぶりが長くなったが、そろそろ、本稿の主張を記述させていただく。

「楽浪海中と同じ」倭人“が鬯艸を貢した」、そして、「鬯艸が縁起物であった」ということであれば、神仙思想の「蓬莱神仙の地」というものを意識しないとならないだろう。それは中国の古代(戦国時代)において方士(神仙術を行う人)によって説かれた三神山(蓬莱・方丈・瀛州)の一つで、山東地方の東の海中にあり、仙人が住み不死の薬を作っていた。この蓬莱神仙とは一体何のことなのだろうか。”宮殿は金玉、白色の鳥獣がおり、玉の木が生えている。近づけばどこかへ去り、常人には至りえないところ”と解説されている。中国の戦国時代において説かれたのであるから、蓬莱山の伝承は戦国時代をもっと遡る時代のことと思われる。そして、山東地方の東の海というから、近くは黄海か東シナ海辺りが浮かぶが、更に遠方をイメージすれば日本列島ということになる。仙人が住み不死の薬を作っていたというのは、仙人のように長い髭の人たちが大勢いて恰も長寿の薬を服用しているかのようであったと解してみたいかがであろうか。この地(蓬莱山)は、まさしく「縄文時代の日本列島」ということになるのではないだろうか。



例えば、三内丸山遺跡(大型掘立柱建物)に朝日が昇ってきたら、それは金玉の宮殿に見えたに違いない。

図4 三内丸山遺跡(青森県青森市)

蓬莱の地には白鳥や白鹿が群れていた。翡翠の勾玉を樹木に吊るしたらそれは玉の木が生えているように見えた。それは神聖な祈りの時だった。日本列島における、およそ1万6千年前から3千年前の1万年を超える期間を縄文時代として時代区分している。そこでは時間は緩やかに流れ、縄文人が豊かな生活を営んでいた。この東の海中の日本列島の縄文人の見聞が何らかの形で、相当美化され誇張されて中国に伝わった。それが神仙の正体ということではないだろうか。

そこで、この「日本列島が神仙の地」ということを誰が古代中国の山東地方の人々に伝えたのかということが次に解明されなくてはならない。

一つの可能性は、先述の「鬼界カルデラ大噴火」で壊滅的影響を受けた時の九州島で暮らしていた縄文人の避難対応であろう。彼らが噴火の発生した南島方面に移動することは考えにくい。とすれば、列島の東方面か故地である朝鮮半島或いは中国の東海岸方面(山東半島界限から江南地区界限)に避難した可能性が大きいと考えられるのである。そして、避難した先々で「日本列島の縄文人の見聞」を伝えたものと考えられないことはない。しかしながら、彼らが移動した時期(7000年前)から周の時代(紀元前1000年頃前頃)までの期間が長すぎはしないか懸念される。また、神仙思想が中国の戦国時代頃から唱えられたこととも整合しないように思われる。

となると、古田武彦氏の「中国海」説が俄かに脚光を浴びてこないだろうか。「中国海」は、人事・文化・経済などの交流が盛んに行われる環境にあった。そして、縄文人をして中国大陆との、また、朝鮮半島との様々な交流の可能性を指摘したのである。では、具体的にどのようなことが行われていたのだろうか。

WEBSITE に「琉球列島間のタカラガイ需要・供給に関する実証的研究-新石器時代から漢代まで」(研究代表者:熊本大学 木下尚子教授)という研究論文要旨が掲載されている。それによると、“中原で消費されたタカラガイは台湾を含む中国東南沿岸地域で採取され、山東半島を経由して黄河流域にもたらされた可能性が高い。中国において、商・周代併行期、台湾や琉球列島で玉加工品やこれに関わる製品が流行する。これはタカラガイの採取を目的として移動した人々の動きを反映する可能性がある”というのである。

タカラガイが山東半島を経由して黄河流域に至ったというのであるから、このような交流が契機となって、倭人が周王朝に「日本列島が神仙の地」であることを伝えた。そして、長寿の薬を服用しているかのように長寿の人たちが多いことを伝えた。肝心なのは、琉球の人たちの大半は東南アジアをルーツとする人たちであったこと。従って、薬草には詳しい人たちであったのである。そのような薬草の中に海洋国日本の象徴的な薬草があっても何の不思議もないものと考えられるのだからいかがであろうか。そして、それは陸地の幸に恵まれていた東南アジア出自の人たちからすると若干の驚愕であったものと思われる。陸上では見られないものだったから。それは「海藻」だったのではないだろうか。「海藻」は後に神饌の一品として供えられるようになる。

最後にコメントしておきたいことがある。それは、白雉を献じた越裳と鬯艸を貢した倭人のことである。越裳は国であったのか不詳であるが、陸続きのとても遠いところとして記述されている、そして、(国でない)倭人は海を隔てた遠いところとして記述されていると考えていいのではないか。とすると、共に周国の威信を主張したものと理解できるのではないだろうか。

さて、本章のタイトル「倭人とは誰か」の答えである。それは、日本人(=琉球人)ということなのだが、具体的にはタカラガイを供出した琉球列島の人たちと考えられる。しかしながら、紀元前1000年前後に琉球列島に中国に朝貢するような国や集落と集落を連合するような群れがあったとは考えられないのであり、実際に「海藻」が貢されたとしても、それはタカラガイを運ぶ人たち(山東界隈の倭人)に託されたものであったろう。それを『論衡』では大きくとりあげて記述したのではないかと考えられる。

第3章 弥生人の渡来

第1章では南方からの渡来が縄文人に伝えたもの、第2章では縄文人と大陸(中国)との関係についてなど記述してきたが、本章では弥生人の渡来について記述していきたい。先述の三重構造説によれば、この弥生人の渡来は北東アジア人だということである。北東アジア人が弥生時代を形成したというのであれば、その渡来の時期は縄文晩期頃から弥生時代中頃までということになるだろう。具体的には紀元前1000年から紀元前後くらいの渡来であろうと考えられる。また、北東アジアとは地理的にどのような範囲なのかということであるが、日本の歴史学・考古学では朝鮮・満州・モンゴル東部・ロシアの極東が一部で用いられている範囲と言われているのでそのように理

解して大きくは外してないだろう。

古気候学によれば、約5,000年前から2,500年前には世界的な寒冷期があり、その後、2,500年前から現在までは温暖期にあるという。そして、有史時代の気候としては、古代寒冷期(紀元前1,000年～紀元前200年)、古代温暖期(紀元前200年～200年)、中世寒冷期(古墳寒冷期:200年～700年)が区分されている。(Wikipedia)

この古代の世界的な寒冷期(5,000年前から2,500年前)に北東アジアでは何が起こっていたのであろうか。より温暖な地域への移動が起こっていたであろうことは想像に難くない。即ち、北東アジアから中国への進出であり、朝鮮半島への進出である。匈奴の中国王朝との確執、扶余族の朝鮮半島への進出などが代表例としてあげられるであろう。

(1)「オオワタツミ」と「オオヤマツミ」

『古事記』の記述では、イザナキ・イザナミが高天原から派遣されて大八島と島々を生む。次に、これらの大地を守る八百万の神々を生むのだが、その中に「オオワタツミ」(海の神)と「オオヤマツミ」(山の神)が生まれている。

そして、「オオヤマツミ」の娘(木花之佐久夜毘売)は、天照大神の孫(ニニギ)に感染められ結婚する。その子の火遠理命(山幸彦)は「オオワタツミ」の娘(豊玉毘売)と結婚する。その子のウガヤフキアエズは、「オオワタツミ」の娘(玉依毘売)と結婚し若御毛沼命(神倭伊波礼毘古命、後の神武天皇)を生む…という流れになっている。即ち、「オオヤマツミ」と「オオワタツミ」は神武天皇を初めとする皇統譜の祖神ということになっているのである。

しかしながら、記紀はこの二柱の神の出自を明かさない。そこで、この二柱の神の出自を追求する研究が取り組まれてきている訳であるが、「オオワタツミ」については、綿津見三神の子(宇都志日金拆命:うつしひかなさくのみこと)が穂高見命で、安曇氏の祖神と伝わっていること、また、その末裔が宮司を務める志賀海神社(福岡県福岡市志賀島)は安曇氏伝承の地である。『後漢書』によれば、倭奴国は紀元57年に後漢に朝貢し光武帝から金印を印綬されているが、この金印が江戸時代に福岡市志賀島で発見されている。このようなことから、安曇族と奴国は一体をなすものと考えられているのが一般的な見解と思われる。そして、安曇族は奴国に留まらず、持ち前の海運力を活かして列島各地に進出したようである。進出先に安曇、渥美、熱海、阿積などの名を残している。

この奴国、『魏志倭人伝』では北九州にあり、2万余戸を数える大国と記述される。このように大国が形成されたのは稲作を始めとした新しい技術を帯同した集団が渡来して、村々から国へと発展してきたものであろう。そして、縄文人の発想には考えられそうもない中国に朝貢したということなど、この奴国は典型的な弥生時代の渡来人が形成した国であると考えられる。この渡来人を総称して「オオワタツミ」と記述したのであろう。

一方、同じように弥生時代に渡来したと考えられる「オオヤマツミ」一族がいる。こちらは、「オオワタツミ」が北九州界隈に着地した関係からか、北九州以外の地域にその着地の痕跡を残している。そして、彼らは製鉄の集団を標榜しているかのようなのである。

『古事記』に「八岐大蛇」の記述がある。高天原を追われたスサノオは出雲国で(オオヤマツミの子の)アシナヅチ・テナヅチ老夫婦の依頼で「八岐大蛇」を退治して老夫婦の娘のクシナダヒメを娶る。老夫婦からは何人もの娘たちが奪われていて、退治した「八岐大蛇」から刀が出てきた。これらの話の意味するのは、製鉄を業としていた各地のオオヤマツミ系の豪族の姫が奪われた。そして、彼らの技術と施設(たたら製鉄)が地方豪族に奪われてきていたということになるのだろう。象徴的なのは、「八岐大蛇」の尾から出てきたという刀でスサノオから天照大神に献上したものである。三種ノ神器の一つの天叢雲剣(草薙剣)とされる。

長野県諏訪市に足長神社(祭神:アシナヅチ)と手長神社(祭神:テナヅチ)が対のように鎮座している。この両社、由緒は不確かなようであるが、オオヤマツミ系の製鉄豪族が諏訪に降臨したとすれば、それは製鉄を伝えたことのほかは考えにくいのではないだろうか。諏訪地方は「諏訪鉄山」とよばれるように褐鉄鉱山が点在している。これが湖沼砂鉄の源になっており、オオヤマツミ系豪族の諏訪降臨の所以となっているのではないかと考えられる。そして、諏訪明神と共に栄えたことを明かすかのように、大同年間(806年~810年)に御表衣祝有員(みそぎほうりありかず:諏訪大社上社大祝の祖)が足長神社を崇敬して広大な社殿を造営したと伝わる。(Wikipedia)

この「オオヤマツミ」の列島各地への進出は各地の大山祇神社の鎮座などにその足跡を残している。概ね、海運関係や製鉄関係の豪族を祀ったものと考えられるが詳述は今後のことにさせていただきたい。

さて、以上の記述で「オオワタツミ」と「オオヤマツミ」は稲作や製鉄技術を帯同した渡来集団であることが明らかにされてきた。問題は、彼らはどのような集団でどのようにして日本列島に辿り着いたのかということである。

そのヒントが『三国志』に記述されている。「オオワタツミ」については『魏志倭人伝』にその一端が記述されている。“男子は大小となく皆鯨面文身す。古より以来其の使い中国に詣るもの、皆自ら大夫と称す。夏后少康の子会稽に封ぜられしに、断髪文身し以て蛟龍の害を避く”。

『史記』によれば夏少康の庶子である無余が会稽に封じられ越の始祖になったと伝えられる。そして、無余は会稽の風俗に倣って断髪文身したのである。これらの記述から、『魏志倭人伝』では中国の江南地方の風俗が倭人(北九州)に伝わったものとしているのである。

また、『梁書』によれば、“倭は自ら太伯の後という。俗は皆文身す”と記される。太伯は、中国周国の太王の長男であったが、末子に相続を譲り無錫の地で呉を興した。その後、紀元前473年越王句踐との闘いに敗れて呉は滅亡する。この呉の滅亡と共に、呉の領域とされていた山東省・江蘇省・安徽省の倭族たちが朝鮮半島中・南部へ

亡命し、その一部が日本列島に渡来して、「自ら呉太伯の後なり」と伝えていたとされるのである。

『三国志』の魏志韓伝(辰韓伝)の記述。“辰韓は馬韓の東に在り。その耆老は、世を伝えて自ら言ふ、古の亡人にして、秦の役を避け、来りて韓国に適く。馬韓はその東界の地を割きこれに與ふと”。“国は鉄を出し、韓、濊、倭はみな従いてこれを取る。諸市で買うにみな鉄を用いるは、中国が錢を用いるが如し。また、以て二郡にも供給す”。

ここに記述される倭は朝鮮半島の南部に存在した、呉の滅亡に伴いこの地に亡命してきた集団なのであろう。馬韓は半島の西側に存在したと考えられるので、その東に在った辰韓は倭の北側で接していた地区と考えられる。そこでは鉄が算出されていて、各国に供給されていた。そして、錢のようにも使われていた。

しかしながら、これでは日本列島にたたら製鉄(技術)が伝播したという集団の存在が明らかにならないのである。また、製鉄(技術)が伝播した時代は、「三国志」の時代よりもっと遡らないとならないと思われるのである。

WEBSITE に愛媛大学で開催された、東アジア古代鉄文化センターシンポジウム「中国西南地域の鉄から古代東アジアの歴史を探る～鉄の起源を求めて～」(2007年10月)の内容が紹介されている。本論に関係するエッセンスは以下のとおりである。

- ① 紀元前2000年ころのヒッタイトの都ボアズキョイ遺跡から製錬された鉄が発見された。その製法は「塊錬鉄法」といい、日本における「たたら製鉄」と同じである。
- ② 中国の四川省成都平原(三星堆遺跡)は青銅器文明を花開かせた古蜀の都で、黄河文明とは異なる文化を長く維持してきた。そして、中国西部には初期塊錬鉄が偏在して出土しており、初期鉄器が西から早くに伝来した地である。
紀元前9世紀には中国に「塊錬鉄法」が伝播している。
- ③ これらのことは北のシルクロードとは別に南西シルクロードの存在の可能性を示している。揚子江文明が成都を経由してインド、メソポタミアなどと繋がっていた。
- ④ 日本列島に大陸から鉄器が伝わったのは弥生時代前期(紀元前3世紀頃)で、製鉄が始まったのは5世紀後半から6世紀である。日本で始まった製鉄は、漢代以降中国や韓国で主流となっていた「溶融銑鉄法」でなく、「たたら製鉄」(塊錬鉄法)であった。

弥生時代に中国の江南地区などから先ずは北九州に渡来した人々が稲作を伝えたということは定説とされていると考えていいのだろう。そして、上記の記述から、それらの人たちは既に「たたら製鉄」技術を備えていたと考えられる。とすれば、当然に稲作と共に「たたら製鉄」も帯同して日本に渡来したのではないかと考えられるのである。ところが、日本で「たたら製鉄」が始まったのは800年から1000年も後のことだというのである。

これは一体どういうことなのだろうか。考えられるのは、鉄器(或いは鉄素材)の伝播とたたら製鉄技術の伝播は同時並行的に現出していたが、鉄器(或いは鉄素材)を使用の方が簡便であったため、こちらに優位性があったことから、たたら製鉄が一部の集団(一部の地域)にのみ定着して行われていたと理解することである。そして、5世紀後半から6世紀に朝鮮半島との関係から鉄器(鉄素材)の供給が不安定になって来たため、次第にたたら製鉄にシフトしていったと。

しかしながら、それでは記紀がオオヤマツミを記述していることと整合しないのである。先述のように、オオヤマツミは皇統譜に関わる集団であった。とすれば、その記述が虚偽のはずがないのである。ということは、オオヤマツミは一部の地域に定着したというような集団ではなく、全国的に展開された集団でなければならないのである。

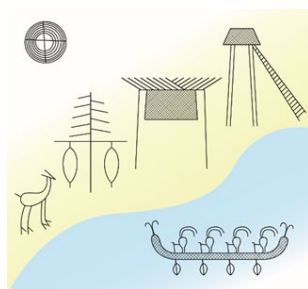
ここで、私たちはたたら製鉄の初期の技法、即ち、「野づみ」の技法に着目しなくてはならないのではないだろうか。「野づみ」においては簡便な炉で燃料を焚いて砂鉄から鉄を作る。そして、燃料の木材が枯渇すると場所を移してまた鉄を作る。このようなことが繰り返されるのである。そのような小さな痕跡は2000年以上も後では発掘することが極めて困難なのである。川岸砂鉄場は幾多の洪水で流された。海浜砂鉄場は津波で流された。だから、なかなか「野づみ」の遺跡は発掘されないのではないかと考えられる。

さて、論じてきたように「オオワタツミ」と「オオヤマツミ」は中国の江南地区からの渡来集団であったと考えられるのであるが、これらの人たちは弥生文化を運んできたのではあるが、いわゆる「日本人の三重構造モデル」に言うところの弥生人ではないと考えられるのである。何となれば、江南地区からの渡来集団が北東アジアのDNAの人たちではあり得ないからである。となると、次には弥生時代における北東アジアからの渡来の集団というものに言及していかなくてはならなくなってくるのである。

(2) 相撲のルーツとは何か

弥生時代に海外からもう一つの渡来があった。それは、稲作とか製鉄とかの経済活動に関するものではなく、文化活動に関するものだった。本項ではそのことについて記述を進めてまいりたい。

稲吉角田遺跡(鳥取県米子市)から出土した土器に描かれている絵が当時の祭祀など様々なことを語りかける。稲吉角田遺跡は弥生時代中期＝紀元前1世紀頃の遺跡と言われる。従って、時代は扶余族の渡来より以前のことと考えられる。土器に描



かれているのは、集落の中央と思われる場所に銅鐸と思われるものが吊るされた樹木と祭殿。そして、少し離れたところに梯子が架けられた高層神殿が描かれている。また、周辺には自然界を代表して鹿が描かれ、集落に向かって船が漕がれて、太陽が射し輝いているといった光景である。

図5 稲吉角田遺跡・土器絵(イメージ図)

鹿を狩猟していた集落があった。そこに外国人を乗せた船が着いた。太陽を意識しているので稲作をもたらしたのであろう。銅鐸を吊るした樹木と祭殿では五穀豊穡を祈願した。高層神殿は尊い人を祀ったものであろうか。

この高層神殿は、島根県立古代出雲歴史博物館(出雲市)に復元、展示されている古代出雲大社の巨大本殿の模型の原形をなすものであろう。そして、この古代出雲大社の“階段を上っていく先に本殿がある”という態様は、各地神社の幾つかがそれを擬していることに気づかされないだろうか。

縄文時代における信仰は、自然崇拜(種族安全祈願)、生命尊厳(種族繁栄祈願)というものであったものと考えられるが、そこに大陸からの文化が渡来して弥生時代に入るとこれらに加えて、五穀豊穡と首長崇拜ということが行われるようになっていったのではないかと考えられる。そして、信仰(祭事)を行う場所も巨石、巨木や神山を仰ぐような位置に祭殿や神殿を構えるようになっていった。やがて、銅鐸が渡来すると祭具として銅鐸が重要な位置を占めるようになり全国的に広がっていった。



出雲地方においては、そこに「オボー祭り」の祭祀が渡来、「四隅突出型墳丘墓」に発展していった。出雲弥生の森博物館(出雲市)には、「西谷3号墓」のジオラマが館内に展示されている。ジオラマでは、四隅突出型墳丘墓の上に4本の巨柱が建立されつつあり、完成すれば高層神殿が厳然と現れるはずである。

図6 西谷3号墓(現地説明図)

令和5年(2023年)に全国邪馬台国連絡協議会が投稿論文集『みんなの邪馬台国』(第1号)を発刊した。その中の小論「相撲のルーツは四隅突出型墳丘墓だった」で論述したところであるが、モンゴルの「オボー祭り」に発するブフ(相撲)、弓射、競馬は、朝鮮半島経由で日本に伝播したのだった。

平成16年(2004年)に高句麗遺跡群の一つとして世界遺産登録された「安岳3号墳」に描かれている壁画は、当時の高句麗において相撲のような格闘技(ブフ)が行われていたことを示している。また、同じく「徳興里古墳」の壁画には後の日本で行われた“流鏑馬”の原形のような光景が描かれている。

高句麗は紀元前37年から668年に中国東北部の南部から朝鮮半島北中部に存在した。この高句麗は扶余族が建てたとされている。扶余族はモンゴルの一部族で紀元前二世紀末満州平原に進み、ツングース諸族を征服して扶余国を立てたとされている。そして、この相撲のような格闘技(ブフ)や流鏑馬のような競技が隠岐の島経由で古代出雲に、人々と共に伝播したのと考えられる。『日本書紀』の垂仁紀に記述される出雲の野見宿禰の「掬力(すまい)」の話はつとに著名である。

大事なのは、それらの原点は「オボー祭り」であること。「オボー」とは山や峠に土や石を円錐形に積み上げた構造物で天神地祇が降りてくると信じられている。毎夏の「オボー祭り」では供え物をして五畜の豊穡や息災を祈り、「オボー」の周りを巡る。その時積み石を行うこともあると言われる。そして、神様に競馬・ブフ・弓射を奉納する

のである。

この「オボー」が「積み石塚」に、そして「四隅突出型墳丘墓」に発展していったのではないかと考えられるのである。前述の「西谷3号墓」に建立されたと考えられている高層神殿の下には王の棺が埋葬されていた。 図7 「西谷3号墓」高層神殿柱跡



そして、その上から200個にもものぼる土器が出土したことから、棺が埋葬された後「ブフ」(相撲)を奉納し、参列者は王を葬送して飲食していたのではないかと考えられるのである。

角力取山古墳(すもうとりやまこふん)が岡山県総社市に残る。方墳で、築造年代は墳形から5世紀後半頃と推定されている。古墳名はかつて戦前には古墳の近くに土俵が据えられ、御崎神社のお祭りの時に奉納相撲が催されていたことによると言われる。御崎神社は岡山県総社市地頭片山に鎮座する。古より美簀郷(かつての山手村三須村)の氏神にして地方最古の神社とされている。祭神はスサノオ、大国主命、少名彦名命の三柱である。そもそも総社市は備中国の国府所在地であり、古代吉備国の中心地として栄えた地域である。この地に、出雲系の神々が祀られていることから、古代に出雲からこの地に進出してきた人々がいたことを想像させる。古来、出雲と吉備は密接な関係にあったのである。(但し、現在はお祭りも絶え、土俵もなくなっているという)

この御崎神社は一つの例題であるが、日本全国に鎮座する神社において、奉納相撲・流鏑馬・競馬式といった神事が行われているのは少なくないのではないかと考えられる。これらはモンゴルにおける「オボー祭り」が源流であり、それが朝鮮半島に降り隠岐の島を経由して先ずは出雲に定着したことは既述のとおりである。

先述の稲吉角田遺跡は弥生時代中期、紀元前1世紀頃の遺跡といわれる。そして出土した土器に描かれた集落の風景は、近在の有力遺跡の祭祀を描いたものであろうとする説が有力である。とすれば、紀元前1世紀頃(銅鐸時代)に山陰地域では高層神殿を建立して祭祀が行われていたということになる。そして、そこに四隅突出型墳丘墓の文化をもつ集団が移住してきてその文化を定着させた。山陰地区を中心に四隅突出型墳丘墓が広く分布するのは良く知られるとおりである。中でも西谷3号墓のような大型の墳丘墓は、有力豪族(王族)のものと考えられる。一方、有力豪族(王族)はそれまで高層神殿を造築して祭祀を司っていた。とすれば、西谷3号墓に残る巨柱跡は、そこにランドマークとして高層神殿が設置されていたことを示すものと考えていいのではないだろうか

そして、御崎神社の例にみるように、首長層を葬送する神殿の建立、奉納相撲・流鏑馬・競馬式といった神事が全国に広がっていったのではないかと考えられる。そし

て、それらを伝えたのは誰かと問われるならば、それは扶余族(北東アジア)の流れを汲む人たちと答えることになるだろう。

第4章 古墳人の渡来

「日本人の三重構造説」によれば、20,000年前から15,000年前に大陸から分かれた縄文人が縄文早期頃までは小さな集団を維持してきたこと、そして、稲作文化などがもたらされたとされる弥生時代には北東アジアを祖先集団とする人々の流入がみられ、縄文人に由来する祖先に加え弥生人には第二の祖先成分が受け継がれていることが分かった。古墳人にはこれらに加え東アジアに起源を持つ第三の成分が存在しており、大陸からの人の移動と混血が伴ったことが分かった。そして、この三つの祖先は現代日本人のゲノム配列にも受け継がれているというのだ。

日本には古墳時代と時代区分される時代がある。ご承知のように、弥生時代に続く3世紀後半から7世紀頃までをいうのである。この時代大きくとらえるならば、3世紀に入り奈良県に初期ヤマト王権が誕生して、次第に全国に覇権を拡大していった過程であった。そしてそれは、奈良県に纏向遺跡などに古墳が造営され、次第に古墳造営が全国展開されていった過程と重なっているのである。とすれば、東アジアに起源を持つ古墳人とは、初期大和王権を誕生させた集団ということになってくるのである。では、それは誰であったのか。以下において検討していきたい。

(1) 東アジア起源の文化の渡来

東アジアの概念は広義には中国、朝鮮半島、台湾、日本列島などを含むのであるが、ここでは狭義に黄河流域の人たちのこととしておきたい。そしてまた、渡来の時期については渡来してから数百年を経て日本に定着できたであろうとするならば、その渡来時期は少なくとも紀元前でなくてはならない。

① 土洞墓と「地下式横穴墓」

「土洞墓」は中国の墓の一種である。地表から垂直に掘り下げた墓道と、その下端から横に水平に掘りこんだ墓室からなる単純な構造の墓である。墓室内になんらの施設を造らないものと、空心塋で棺槨を造るものがある。戦国時代から前漢時代にかけて流行した。(ブリタニカ国際大百科事典)

日本においては「地下式横穴墓」と言われる墓がある。地面から竪坑を掘りそこから横穴を掘って埋葬施設を構築しそこに死者を埋葬する。5世紀から6世紀に宮崎県南部から鹿児島県東部に現れた地域制の強い墓制として知られる。

(Wikipedia)

この「地下式横穴墓」のルーツは、朝鮮半島や畿内政権との交流から成立した墓制とする理解が有力のようであるが、まだ判然としていない状況である。また、「土洞墓」との関連についても定まった説が提出されてはいない。

しかしながら、この二つの構造の類似から考えると中国から渡来したと考えることが最も自然であると思われるのだがいかがであろうか。そのことを裏付けるかのように、中国山東省に極めて類似の墓が発掘されていることが分かってきた。山東省タンジョウ市で多くの地下式横穴墓が発掘された。124基を数え、その多くは東周時代(紀元前8世紀～紀元前5世紀)のものという。また、宮崎県串間市王之山で発見された「玉壁」の祖型と思われるものが、中国山東省の魯国の時代(紀元前8世紀～紀元前3世紀)の都から出土したというのだ。玉壁は一般的には威信財とされるのであるが、また、祭祀や占いにも用いられていたとも言われるものである。

② 神仙思想と「ニライカナイ」

神仙思想とは中国の周の末ごろ(前3世紀前後)に燕(河北省)や齊(山東省)の方(術)士たちが説いたもので、仙人にあこがれて現生を超越し、不老不死の薬を得て天地とともに終始し、空を飛ぶなど自己の思いのままの行動や生活の実現を願う思想をいう。

『史記』によると、三神山とは蓬萊、方丈、瀛州であり、そこには仙人が住み、不死の薬がある。『列子』には、渤海の東、幾万里もの遠くに岱輿、員嶠、方丈、瀛州、蓬萊の五山があり、そこには不死の食べ物があり不老不死の仙人が空を飛んでその間を往来している…とある。(日本大百科全書)

「ニライカナイ」は、沖縄県や鹿児島県奄美群島の各地に伝わる他界概念のひとつ。理想郷の伝承である。奄美ではネリヤカナヤとも呼ばれる。遥か遠い東の海の彼方、または、海の底、地の底にあるとされる異界。豊穡や生命の源であり、神界でもある。年初には「ニライカナイ」から神がやってきて豊穡をもたらし、年末になるとまた「ニライカナイ」に帰るとされる。(Wikipedia)

この「ニライカナイ」は、琉球王国が成立すると国家の統治機構に組み込まれた。国王や間得大君を中心とする祭祀において、「ニライカナイ」への祈りが重要な位置を占めるようになる。国の繁栄と五穀豊穡を願う中心的な信仰としてその権威が高まっていったのである。どういうことか。つまりは、本来の思想が変質してしまったということであり、その起源が極めて曖昧なものとなってしまったということなのである。

そもそもは中国の黄河流域において説かれた神仙思想が、沖縄や奄美に渡来し「ニライカナイ」として定着したはずである。(もうこの地から東には山島がないので)「彼方の理想郷」としたのではないかと考えられるのである。

③ 齊国の涅と田んぼの泥

齊国は古代中国の国で、特に染物技術が発達していたことで知られている。その中でも「涅(くろつち)」を使った染物は独特の色合いと技術で人々を魅了した。涅染めは泥の成分を利用して絹を染める伝統的な技術で、当時としては複

雑な工程と高い技術力によって作られた独特の風合いなど貴重な染物として珍重された。(YAHOOJAPAN AIアシスタント)

大島紬は鹿児島県南方の奄美群島において、中でも奄美大島で伝統工芸品としてつくられる平織の織物。手で紡いだ絹糸を泥染めしたものを手織りした絹布、もしくはその絹布で縫製した和服をいう。しなやかで軽く、独特の黒褐色を基調とした繊細な折柄も評価され日本の絹織物のなかでも高級品として知られる。およそ50工程の手作業により長時間をかけて製作されるという。

(Wikipedia)

いかがであろうか。解説者は異なるのだが殆ど同じことを説明しているのではないだろうか。この大島紬の発祥の歴史については諸説あり明確にされていないようであるが、1300年前には既に古代染色が行われていたと伝わる。泥染めの起源についても、偶然に田んぼに着物を浸したら綺麗な褐色に染まったというような話が伝わっているようであるが、稲作が琉球地域に伝播したのはもっと新しい時代であった。上記の斉国から染色技法が伝わったとすれば、大島紬の発祥は一般に考えられているよりもっと古い時代だったのではないかと考えられるのである。

では、これらの文化を帯同して琉球へそして九州南部に渡来してきたのは誰であったのかということが次に論じられなくてはならない。これだけの大きな痕跡を残しているのであるから、単一の小集団であったとは考えられない。小集団であったとしても、繰り返して繰り返しての渡来があったというような場合が該当する。また、大集団の渡来があったとすればそれも該当する。次項においてそれらの渡来について記述していきたい。

(2)黄河流域の集団の渡来

先述のように古墳人を形成した集団は、「三重構造説」によれば東アジア起源の集団でなくてはならない。そして、渡来してから日本の地に定着する期間を考えると古墳時代を遡ること数百年を要したはずであろうことから、その渡来は少なくとも紀元前であったはずなのである。そのような時代に上記のような文化を帯同して日本にやってきたのは一体誰だったのであろうか。

その答えとして一般的に言われているのは、朝鮮半島経由で渡来したとか船で直接九州のどこかに渡来したとかという概念の説明か、或いは、時代を直接的に古墳時代以降にして技術者の招聘や仏教の伝来などで説明するケースが多いように見受けられるのである。しかしながら、そのような概念説明ではそうですか止まりで歴史が映像として描かれない。また、技術者たちや仏教を伝えた人たちではヤマト王権建国に影響した人たちではないし、全国的な(DNA の)広がりをなしたのかという問いに明瞭に答えられるのだろうか。はてさて、この立ち往生ともいえる状態を脱出するにはどうしたらいいのだろうか。

① 卑弥呼と天照大神

卑弥呼は、中国の歴史書『三国志』(魏志倭人伝)の中で倭国において初めての女王として描かれている。天照大神は、日本の歴史書『古事記』・『日本書紀』の中で日本列島などが誕生した後において初めての女神として描かれている。このことは、記紀が編纂された頃『魏志倭人伝』が大いに読まれており、卑弥呼が日本統一の中心像として意識されていたということなのであろう。

卑弥呼は道教を背景とする鬼道をよくして国(民衆)を導いた。天照大神は高天原にあり、巫女(宗教的権威)的な采配を振るった。道教は中国発祥の教えなのである。一方の高天原は天上界というのであるが漠然としており記紀の中では正体が明かされない。しかしながら、それは日本国内に在るものではなく、当時として上位の地域(国)或いは特別な概念のように理解されるのである。

(琉球の人たちからみて)「ニライカナイ」(東の海の彼方の理想郷)に神(卑弥呼)が居た。天照大神が天の岩屋戸に隠れると世は真っ暗闇となってしまった。そして、岩屋戸が開けられると…。(東の海から昇ってくる)太陽神が天照大神であった。

邪馬台国の女王卑弥呼は、(九州大半を治める)倭国王に共立される。やがて、(邪馬台国は)大和国建国をリードする(邪馬台国東遷説も有力)。天照大神の孫のニニギが日向国に降臨、3代にわたり統治する。やがて、来孫のウガヤフキアエズが東征してヤマトにて神武天皇として即位する。

『魏志倭人伝』には、正始4年に倭王(卑弥呼)が魏に使いを派遣し、和錦(絹織物)などを正献したと記述されている。『古事記』においては、天照大神とスサノオが誓約するもスサノオの乱暴狼藉が止まず、スサノオは天照大神が機織女たちに高天原の神々の衣装を織らせていることを知るとその機織り場の屋根に上って穴をあけ、そこから皮を剥いだ血だらけの馬を投げ込んだのだった。これらの記述は当時の日本に絹織物の技術が渡来していたこと、また、上位者が絹織物を着用していたことなどを伝えているようである。

卑弥呼が死亡した時(248年か)、大きな塚を造り埋葬した。その時奴婢100余人を殉葬した。縄文時代には偉大な首長がいなかったためか殉葬の例がみられないようである。とすれば、殉葬はやはり中国からの渡来文化なのであろう。一方、天照大神は神様なので死亡という記述はない。しかしながら、卑弥呼の死亡と相前後する頃、奈良県桜井市「纏向遺跡」では大型古墳が造営されている。また、日本書紀の記述では、垂仁天皇28年倭彦命が亡くなられた時殉葬が行われた。これに心を痛めた天皇は、皇后(ヒバスヒメ)が亡くなられた時殉葬の代りに埴土で人や馬などを造ってこれに変えたとある。

以上により、卑弥呼と天照大神の幾つかを対比して分析してきたのであるが、記紀において天照大神は卑弥呼を擬して記述されていることが概ね確認されるのではないだろうか。となると、今度は卑弥呼の出自について、誰か、どこかなどということについて知りたくなってこないだろうか。

② 太公望と徐福・卑弥呼

一つの具体的な事象(記述)と、また別の一つの具体的な事象(記述)が有機的に結ばれて繋ぐことができたなら、若しかしたら歴史的な物語が浮かび上がって来はしないだろうか。遠い過去の何千年も昔の物証の少ない時代の歴史を再現するには、そんなスタンスでのアプローチも必要なかもしれない…。

イ) 太公望は誰か

呂尚(りょしょう)は紀元前 11 世紀頃の古代中国・「周」の軍師で後の「斉」の始祖である。一般には太公望という名で知られ、釣りをしていた逸話から日本ではしばしば釣り師の代名詞として使われる。

『史記』の斉太公世家では、東シナ海のほとりの出身であり、祖先(姜氏)は四嶽の官職に就いて治水事業で「禹」(中国夏朝の初代王)を補佐したとされる。「周」の軍師として「殷」を牧野の戦いで破り、600年続いた殷王朝が倒れ、周王朝が天下を治めることになる。この軍功によって、営丘(山東省臨淄)を中心とする斉の地に封じられる。姓が姜のため姜姓斉国(姜斉)と呼ばれた。営丘が位置する山東は農業に不適な土地柄だったが、漁業と製塩によって「斉国」は国力を増大させた。紀元前391年姜斉最後の君主の康公が田氏により海島の孤島に追放された。食邑に一城を与えられ祖先を祀ることを許された。紀元前386年に田氏は「周」の安王により諸侯に列せられ、以降の斉国は田斉という。紀元前221年「秦」によって滅ぼされる。

『史記』における呂尚士官の経緯が有名である。「周」の文王が獐に出る前に占いをしたところ、獣ではなく人材を得るとでた。狩猟に出ると渭水(黄河の支流)で釣りをしている呂尚に出会う。二人は語り合い、文王は“吾が大公(文王の祖父)の待ち望んでいた人物である”と喜び軍師として迎え入れ、「太公望」と号した。(Wikipedia)

日本においては太公望といえば釣りの名人ということなのだが、上に記述のように呂尚は中国の古代史において大物の一人と言っているのだから、しかしながら、その出自は諸説あり謎にみちているのである。姜氏といえば西国の氏族であったとされるのだが、羊飼いでなく魚釣りに憧憬が深いという。それは東シナ海近隣の出身とされたからであろうか。また、漁業や製塩で国を繁栄させたというのである。

話は変わるのであるが、日本各地に七福神が祀られている。室町時代に福の神々をセットとして纏められたと言われる。正月ともなれば各地において七福神巡りが行われ、新年を寿ぐと共に本年の弥栄と長寿・金運などなどを祈るのである。この七福神の一根に恵比寿様がおられる。主として漁業の神・商売繁盛の神として祀られているのであるが、他の六神がインドのヒンズー教由来であったり、中国の道教由来であったりする中で、恵比寿様は日本由来というのである。一般的な絵姿は釣り竿を持ち

鯛が抱えられているといったところか。しかしながら、この日本由来ということの意味が今一つ明瞭でないのである。記紀にいうところの蛭子とか事代主とかに擬しているとも言われるのであるが、説得力に乏しいと言わざるを得ないのである。となると、恵比寿様＝太公望という考えが頭を過ぎるのであるが…。

＊蛭子 …イザナギ・イザナミの子。未熟児のため葦船で海に流される。西宮神社(兵庫県)主祭神。社伝では神戸沖に流れ着いた。海を司る神として祀ったという。

＊事代主 …大国主の子神。国譲り神話では美保が崎で釣りをしていた事代主であったが、国譲りを承諾する。

「第2章 倭人とはだれか」で論じたように、中国では東海岸の種族を倭人或いは倭族と称したものと考えられている。それは、東夷を意味するものであり蔑称だったのである。夷(えびす)＝恵比寿(えびす)ということになるのではないだろうか。この倭人或いは倭族は中国東海岸から山東半島付近まで勢力を張っていたといわれる。呂尚はそうした倭人或いは倭族出身と考えられるのである。もっと端的に言うならば、姜族と倭族の合作から生まれたのが呂尚であると。封じられた斉国を漁業と製塩で繁栄させたのは東海岸の倭族の技術力が背景にあることは想像に難くないのである。

さらに、この倭人或いは倭族とは誰かということをもう一度思い出していただきたい。それは「喜界カルデラ大噴火」で壊滅的影響を受けた時に九州島で暮らしていた縄文人だった。彼らは朝鮮半島から中国東海岸に避難対応したのだった。そして、数千年を経て各地に地盤を築いてきたのだった。彼らには「中国海」を自由に動き回れる海運力があつた。だから漁業にも力を発揮できたものと考えられるのである。

太公望が倭人或いは倭族出身であったことは中国の歴史家の知るところであつたはずである。そして、その人たちがそもそも東の海の彼方から来た人たちであることも。しかしながら、そのようなことを『史記』に記述するわけにはいかなかった。歴史書は中原中心でなければならなかったからである。そして、後世の日本においてはそのような性格を持つ『史記』を一生懸命学習したということなのである。だから、太公望が倭人或いは倭族ルーツとはつゆ知らずということになってしまったのではないか。

さて、日本において恵比寿様とは具体的には誰だったのか。日本において恵比寿様は蕃神であつた。即ち、外国からやってきた神であり、それから当地に定着し、当地において信仰の対象とされるようにならなければならない存在であつた。それが、蛭子であつたり事代主であつたりではとても全国区とは考えられないのであるがいかがであらうか。

矢張り、恵比寿様は太公望と考えるのが自然ではないだろうか。何故かと言えば、太公望は斉国において神格化されており、神格化された太公望を頂いて日本に渡来した集団がいたからである。そして、それは徐福である可能性が大ということになる。

ご承知のように、徐福は日本において多くの歴史家から殆ど信頼性のない存在として扱われている。あたかも、中国史において太公望の出自を曖昧にしたかのようで

ある。どういうことかと言えば、実は徐福は太公望と同様倭人或いは倭族を出自とする存在だったことを中国の歴史家は知っていたのではないかと考えるからである。そのために、中国史において徐福の出自などの記述は曖昧なものにされたのである。

さらに日本においては、中国籍と考えられる徐福の後裔が卑弥呼(＝天照大神)である可能性があり、とすればそれは皇統譜に連なる存在となってしまう。日本においては、そのことを避けたかったという疑いがある。記紀に卑弥呼が記述されない所以である。しかしながら、徐福は倭人或いは倭族を出自とする存在だったことが明らかになれば、日本においては徐福の渡来を隠したり曖昧にしたりする必要はないものと考えられるのである。

徐福とは誰か。その渡来はあったのか無かったのか。あったとすれば最初に日本のどこに着地したのか。卑弥呼との関係は…などなどその謎は深まってくるばかりだが、その解が邪馬台国の所在地を告げるのではないだろうか。

ロ)徐福～実在性の検証～

いよいよ、徐福である。秦の方士で、斉国の琅邪郡(現山東省臨沂市周辺)の出身と伝わる。『史記』巻118「淮南衡山列伝」によると、徐福は秦の始皇帝に東方の三神山に長生不老の霊薬があると具申し、始皇帝の命を受け、3,000人の童男童女と百工を従え、財宝と財産、五穀の種を持って東方に船出したものの三神山には至らず、平原広沢を得て王となり秦には戻らなかったと記述されている。また、『史記』巻6「始皇帝本紀」に登場する徐氏は、始皇帝に不死の薬を献上すると持ち掛けて援助を受けたものの、その後始皇帝が現地に巡行したところ、実際に出港していなかった。そのため、改めて出立を命じたものの、その帰路で始皇帝が崩御したという記述になっている。(Wikipedia)

＊方士 … 紀元前3世紀から5世紀の中国で占い・気功・錬丹術・静坐などの方術で不老長寿をなしとげようとした修行者。道教の成立で道士とも。

＊三神山… 蓬萊、方丈、瀛州。神仙思想で説かれた仙境で、遙か東方の海上にあると伝わる。

『史記』の「淮南衡山列伝」と「始皇帝本紀」の記述で共通しているのは、「徐福などの集団が始皇帝に具申してその命で不老不死の仙薬を探しに船出する」ということである。このことを疑ってしまえば、『史記』にこのことが記述されていることが意味をなさなくなってしまうので、先ずはこのことを確認しておくこととする。

さて、この記述で肝心な部分は、“不老不死の仙薬探しを始皇帝に具申した”というところである。このことをもう少し分解すると、先ずは不老不死の仙薬とは何か、それが存在する三神山はどこかということである。先に記述のようにそれは縄文時代の日本のことが美化されて伝わったものだった。仙薬が何かということは置いておくとしても仙境は日本なのである。

次に始皇帝に具申したということであるが、何故に具申したのかということを考えな

くてはならない。始皇帝に容認された計画でなければ、万里の長城作りなどの過酷な役務からの逃亡になってしまうからではなかったか。船作りなど長期間の準備を堂々で行う必要があったのである。そうは言っても、不老不死の仙薬探しなどという雲を掴むような計画を始皇帝が簡単に容認するというのが今の我々には理解するのが容易ではないのである。だから、多くの歴史家が徐福の話に否定的なのであろう。しかしながら、現代のように医薬や医術が発達した時代の人たちと紀元前後の人たちと例えば疫病の恐怖というものを比較できないのではないだろうか。始皇帝は辰砂を賢者の石と信じて不老不死を実現しようと摂取し続けたことで水銀中毒により死亡したとも言われているのである。

＊賢者の石…錬金術師が卑金属を金に変える際の触媒となると考えた霊薬。人間に不老不死の永遠の生命をあたえるものとも。

さて、仙薬とは何かということであるが、既述のように背景に秦国において疫病の流行が頻発し始めていたことを考えなくてはならない。その恐怖は民であっても始皇帝であっても同じであったのだろう。だから、始皇帝は辰砂を服用したのだろう。この辰砂、中国の辰州(現在の湖南省近辺)で産出されたことからかく呼ばれた。中国においては古くから錬丹術などで水銀の精製のほか、朱の顔料、漢方薬の原料として珍重されたのだった。

ところが、(同じように疫病が流行しているはずの)蓬莱山の国(=日本)では長寿の仙人がいるという。だとすれば、自分たちの国(中国)の辰砂より良質の辰砂があるに違いないと皆が自然に考えたとしても無理からぬことである。それは始皇帝も同じだったのである。周の時代の長寿の薬草は、神仙の地(=日本列島)の「海藻」であったのだが、時代は移り替わり滋養強壮のようなものから、秦の時代には疫病に対抗できる即効性が求められるようになったのであろうと考えられる。

次に、徐福などの出港集団のことに記述を進めなくてはならない。そのことを語るには、先述の恵比寿様の話を思い出さないとならない。斉国において太公望が神格化されたのが恵比寿様だった。太公望は東夷の国々をまとめて斉国を強くしたのだった。そして、東夷の国々は倭族の国々だった。とすれば、太公望は倭族の人々にも神として祀られていたことになる。

そして、恵比寿様は誰かが日本に持ち込んだのである。それは斉国を出身地とする徐福などの集団と考えるのが自然であろう。彼らは自分たちが倭族と認識していた。そして、遠い祖先は縄文時代の日本から避難してきたことが伝えられていた。だから、今度は疫病や過酷な労役から避難して日本に渡ろうと考えたのではないだろうか。

『史記』にある“童男童女3000人”という記述は第一印象的には奇異に感じるのであるが、(子供は労役義務の対象外であったから)正しく労役を逃れるために出港するという疑いを排除したものであったろう。また、呂尚(太公望)は渭水(黄河の支流)で釣りをしていて「鯉」を釣り上げたというのであるが、我々が見る太公望の絵姿は「鯛」を抱えているのである。これは一体どういうことなのだろうか。東シナ海近隣の

出身とされる太公望であれば、海の魚(鯛)を釣り上げるのが道理である。これを鯉と伝えたのは太公望の出自を曖昧にしようとした意図が表れているのであろう。徐福が伝えたのは正しく「鯛」のほうだった。だから、今日でも「鯛」の絵姿が伝わっているのではなかろうか。

沖縄県南城市「サキタリ洞遺跡」で、世界最古の釣り針が発掘された。約2万3千年前のものというから縄文時代(16,000年前～3,000年前)以前である。そして、「鬼界カルデラ大噴火」が7,300年前というから、それより15,000年以上も前には、沖縄で釣りが行われていた。沖縄で釣りをしたということであれば、それは海釣りであつたろう。そして、そうした技術は陸続きであつた九州にも次第に伝わっていったものと考えられる。そのような15,000年間も培われた釣りの技術が、「鬼界カルデラ大噴火」の後、(九州地区から)避難した倭人によって朝鮮半島や中国東海岸にもたらされたと考えられる。

一方、日本における鯉など淡水魚の捕獲方法は、縄文時代の遺跡などから葦の水辺に産卵に集まってくるのを捕えるというのが主だったと言われているのである。だとすれば、古い時代の日本においては“鯉を釣る”という絵姿が支持されるものとは考えにくいと思われるのだがいかがであろうか。

(ハ)徐福～渡来ルートと卑弥呼～

ここでの記述は、先ずは東アジア DNA を持つ人たちの日本への渡来ルートということなのだが、渡来した集団は徐福の導いた集団とは限らないのである。当時、秦の攻撃により斉国が滅んでいく過程において斉国や周辺の人たちが海外へ避難していった可能性は小としないからである。しかしながら、徐福一行も日本を目指して出港したことが確認されたのである。従って、問題ははいよいよ日本に渡来した人たちに徐福一行もいたか否かという検証になってくるのである。

今までは、いきなり日本各地の30数か所において徐福の着地を主張しており、プロセスの説明がないことからその主張の信頼性が問われていたのではないと思われるのだが、いかがであろうか。そこで、中国東海岸と日本各地を繋ぐ、徐福の渡来ルートを確認しておきたいと考えるのである。

第3章で記述のように中国江南地区から渡来した弥生人は北九州から始まって、全国に稲作や製鉄を伝播させていった。また、朝鮮半島から渡来した弥生人は出雲地区に始まって、全国に相撲・流鏑馬などと共に神社の原型を伝播させていった。つまりは、北九州地区から出雲地区に至る日本海側には強固な基盤の国々が連なっていたのだった。そうしたことは「中国海」を囲む環・中国東海岸～朝鮮半島～日本列島の国々では情報として容易に知ることができたのだろう。だから、斉国から日本を目指した人たちはこれらの地域ではない方面を目指した。それが、琉球から奄美諸島ということになる。

第4章で記述したように、琉球や奄美大島に残る「ニライカナイ」の思想や、大島紬の伝承がそのことを語っているのである。そして、「地下式横穴墓」により彼らがさらに南部九州に上っていったことを遺しているのである。しかしながら、それは斉国の

人々の動きを語ってはいるのではあるが、徐福の動きであるとは限定できないのである。それが徐福の動きとするには、矢張り、神仙思想の具現や辰砂の探査といったことがなければならないのであろう。

これらのことについて、全国邪馬台国連絡協議会 HP の小論『徐福渡来はやはり真実だった2』(2025年2月～*1)と『卑弥呼は初代斎宮だった』(2023年11月～*2)において詳論した。以下に、関係する部分のエッセンスを紹介する。

*1『九州各地には土蜘蛛が存在していた。そして、土蜘蛛は巫女女王であった。土蜘蛛には兄弟がいて、土蜘蛛が祭祀・呪術を司り、兄弟が政治・軍事を担当していたのである。時代は邪馬台国を遡る時代だった。この九州各地の土蜘蛛は琉球から渡来した人々であり、九州各地に小集落を築いたのだった。この土蜘蛛の巫女女王の墓は洞窟(横穴)だった。記紀の記述にある、天照大神がスサノオの乱暴狼藉に耐えかねて岩屋に隠れた云々の記述がある。この記述は正しく洞窟(横穴)のことを例えて言っているのだろうと考えられるのである。

このような土蜘蛛の小集落が九州各地に築かれていた。この時代はまだ縄文時代の晩期くらいということになるだろうか。やがて、中国江南地区や半島からの渡来が目立つようになり、時代は次第に弥生へと移っていくのである。そして、大型の徐福一行の渡来が訪れる。それは全国30数か所に上陸したという伝承が各地に残されているのである。

実は、この土蜘蛛の思想のルーツ<ノロの呪術・ニライカナイ思想など>は斉国であり、徐福の故郷なのである。従って、多くのことが受け入れられて徐福一行は<琉球から奄美大島経由で>南九州地区に上陸し、小集落に同化し、日向に邪馬台国を築くことができたのだろうと考えられるのである。そして、徐福一行が五穀の種や新しい技術を広めたことにより、集落は大きくなって邪馬台国と名乗るほどになった。また、土蜘蛛の巫女女王も徐福一行から「方術」が伝授され、「鬼道」と言われるほどになり、女王卑弥呼として界隈の土蜘蛛の「巫女女王」を掌握するまでになっていったのである』。 < >は筆者注

*2『魏志倭人伝の記述。其の死には棺あれど槨なく土を封じて冢を作る。始め死するや喪に停まること十余日、時に当りて肉を食わず、喪主哭泣し、他人は就いて歌舞飲食す。すでに葬れば、家を挙げて水中に詣りて澡浴し、以て練沐の如し。(大塚初重:「邪馬台国をとらえなおす」)

上記の“始め死するや喪に停まること十余日”という件に注目していただきたい。ご遺体を棺に入れて、十余日間歌舞飲食していたのである。そうしている間にご遺体はどうなっていたであろうか。そこで卑弥呼がみせた呪術の一つが辰砂を用いてご遺体の腐敗を防止することだったのではないだろうか。即ち、ご遺体を安置した棺の底に辰砂を敷き詰めた。特に頭部や上半身には手厚く辰砂を施したのであろう。こうした施朱が人々に感動と畏敬の念を齎した。ご遺体の腐敗が進まなかったからである。或いはもう一つ、疫病等不治の病の人々に仙薬を調製した可能性も考えられるのであるがいかがであろうか。

中国では漢の時代ころから煉丹術が盛んになり西晋の時代には確立されていたようである。道士の術の一つで服用すると不老不死の仙人になれる霊薬をつくるというのである。このことに関しては秦の始皇帝が著名で、不老不死の仙薬を服用して死期を早めたとも言われる。また、仙薬を求めさせて徐福を東の海に向かって旅立たせたとも言われるのである。秦の始皇帝は巨大な陵墓でも有名であるが、棺の周囲は水銀の川や海で囲まれていたというのである。これらの川や海に必要な水銀はどこから賄おうとしていたのだろうか。西に東に探索の手を伸ばしていたであろうことは想像に難くない。徐福は、東の探索隊の隊長だったのであろう。かかる任務を帯びて徐福は日本各地に土着した。そして、各地に仙薬(水銀)を求めて足跡を残したのだった』。

最後に、日本を代表する『古事記』や『日本書紀』に卑弥呼の記述がないのは何故かということについて、もう一度触れておきたい。

『古事記』や『日本書紀』の編者たちは『魏志倭人伝』を熟読していたことは良く知られるとおりである。また、『史記』の一行一行を食い入るように学習した。だから、卑弥呼が徐福の後裔であるかもしれないという疑いを持ったとしても不思議なことではないのである。そして、各地から報告された風土記の一部に徐福の記述があった。特に日向国の記述が気になった。日向国風土記(逸文)には、土蜘蛛が天孫を迎える云々の記述はあるのだが、本文には徐福の記述がない(と推察される)。原文が語るところを修正したのではないかと思われる。

若し、卑弥呼が徐福の後裔で邪馬台国が東征してヤマト王朝が建国されたとすれば、それは中国がヤマト王朝の祖先となってしまう可能性がある。そのようなことは何としても避けなければならない。そう考えて、『古事記』や『日本書紀』が編纂されたのでは…と疑われるのである。

しかしながら、そのような心配は不要であった。徐福は倭人或いは倭族であったからである。しかも、それを遡る数百年前、周国の立国に大いに貢献した人物(呂尚)、斉国に封じられた呂尚(太公望)も倭人或いは倭族の血を引いていた可能性が高いと思われるからである。